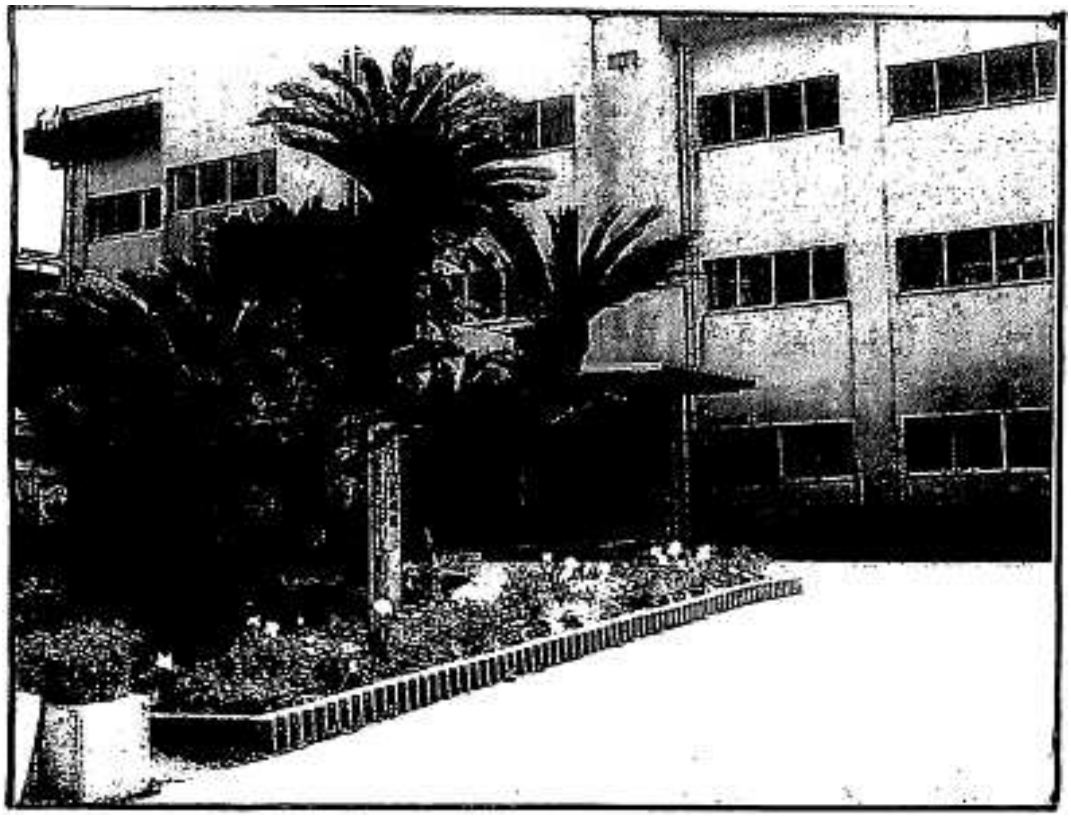
鶴牧藩

正坊山

鶴牧藩庁跡



在藩　一年　　十三年　　三十年
（文政十年～同十一年）（～天保十二年）（～明治四年）
水野忠韶――忠実――忠順

己巳年翻刻
新刊史記評林
鶴牧修來館藏版
新刊史記評林序
新刊史記評林鶴牧
藩主水野忠順命田
中蔦實豊田一貫等
校正刊刻者蓋字畫

鶴牧藩庁

○.１８２７年（文政１０年）水野忠韶は安房北条より一万石を所領し市原市椎津へ移り陣屋を正方山の麓の台地（現、姉崎小学校敷地）に築いて鶴牧藩と称した。

○.鶴牧藩と称したのは水野氏の江戸藩邸が江戸早稲田鶴巻町にあったと言われる。（水野家は徳川家康の生母（於大の方）の生家である）

○.忠韶は文政８年、城主格に昇進しているところから鶴牧城とも公称していた。

○.藩は、１８２７年から１８７２年廃藩置県迄４５年間、善政をしき代々名君の誉が高かった。

○.初代水野忠韶（ただてる）　若年寄の要職にあったが在藩１年たらずで死去、後を養子の忠実がつぐ。
（在藩１８２７年～１８２８年１年間）

○.二代水野忠実（ただみつ）　幕閣の中枢で若年寄として活躍した。名君としても名高く家臣から大変尊敬されていた。天保１２年没後、次男の忠順がつぐ。
（在藩１８２８年～１８４２年１３年間）

○.三代水野忠順（ただより）　深く学問を好み藩士の教育に力を注いだ。
修来館々長田中篤実と副館長豊田一貫に中国歴史書、明版史記評林の改訂を命じ２０人以上の儒者と巨額の藩費を投入して３０年にわたる関係者の血の滲むような努力によって、ついに明治２年６月、鶴牧版史記評林として完成。
（在藩１８４２年～１８７１年３０年間）
鶴牧版史記評林は、内容・印刷・製本共一段とすぐれた初刷から再三の増刷があった。多くの学者間で高く賞賛され、明治天皇の御前開講も行われた。
（姉崎小学校に明治３２年版全巻が所蔵されている）

注　史記は、司馬遷によって書かれた中国最初の体系的な歴史書（紀元前１００年）その注釈書明版（みんばん）史記評林に増訂を加えたものが、鶴牧版史記評林である。

○.忠順は、明治２年鶴牧藩知事に任ぜられたが、明治４年廃藩置県により役を辞しこれによって、武士の支配が終り旧鶴牧藩は自然解体となった。鶴牧藩は市内随一幕末から廃藩置県迄続いた藩である。

鶴牧藩校修来館

○.士族・足軽の子弟は８才になれば必ず入学し２５才で卒業する。
（８才から１４才迄が小学　１５才から２５才迄が大人学）
○.学科　　漢字・算法・筆法・弓・鎗・砲・柔・棒・縛・水泳
○.教授方　館長：田中篤実、副館長：豊田一貫、教授：２０人前後
○.生徒数　７０名～１２０名、学校経費は全額藩主会計とした。年間休日は五節句と鎮守祭日のみ、年末に生徒一人当たり扇子料として教官に銀二匁を贈るならわしがあった。
（陣屋の周囲に藩士の家が軒を連ねていた）Ｐ９参照

○.鶴牧藩時代の名残り
地名
駒ケ崎：馬小屋の合った所
大手橋：城の大手門の前の橋
鶴牧の地名は明治２２年～２５年迄で椎津も姉崎も鶴牧村と称していた。
現在は鶴牧の地名も名称も残っていないが姉崎小学校で「鶴牧集会」「鶴牧だより」として名を残している。
通用門のソテツの木は江戸時代のものと伝えられている。
Ｐ１参照

姉崎小学校の鶴牧藩主・水野忠順と藩校額

注　明治６年　　姉崎小学校は姉崎妙経寺に開校した
　　明治３０年　鶴牧藩跡地に校舎を移転する。

注　明治４年　　廃藩置県で鶴牧藩は鶴牧県と変り忠順は知事の仕事を辞す。
　　明治６年　　千葉県誕生
　　明治２２年　鶴牧村（８村併合）誕生
　　明治２５年　姉崎村に改称、すぐに姉崎町に改める
　　昭和３８年　姉崎町外５町合併して市原市となる。

藩家臣

○.田中篤実　修来館々長　儒学者、号を玉峰という。
水野忠実、忠順に仕える。忠順の命により明版史記評林改訂の重責を担い、明治２年鶴牧版史記評林として完成させた。

○.豊田一貫　修来館副館長　儒学者、号を晩成という。
能筆家として知られる。篤実をよく助け共に重責を果した。
（両儒学者の墓は姉崎妙経寺にある）

○.寺島七郎右衛門高重　鶴牧藩城代家老
七郎右衛門は藩主の代理をつとめ慶応４年戊辰戦争の際、藩内で勤皇（官軍）か佐幕（義軍）で議論が別れたが藩としては朝廷側に味方する事に決定したが血気盛んな５人の藩士が閉じた門を守る仲間を殺して義軍に走ったが官軍に追われ５人共殺され樽にその生首を入れられて陣屋に届けられた。
五つの首は市内瑞安寺に埋葬されたが官軍の手前戒名は最下位のものをつけられた。５人の最年少は１７才であった。その時藩主忠順は七郎右衛門の指示で騒動をさけ城を出て領地の豊成不動堂に避難、謹慎していた。

藩士五人の墓（瑞安寺）

鶴牧藩士の生活

手嶋高重の日記から

当時の生活が分かる貴重な日記

鶴牧藩一万五千石は、文政十年（一八二七年）譜代大名水野忠韶が現在の姉崎小敷地に城地を定め藩生しました。同藩の記録が乏しいなか、藩主忠実・忠順に仕かえ、幕末に鶴牧留守居、家老を務めた手嶋七郎右衛門高重（一八〇七～八一年）の天保期の日記（市史資料集近世編二収録）が残っています。高重は百石取りの上級藩士として江戸藩邸に住んでいました。そして、目付や御側頭取を務め、幕府の若年寄に昇進した藩主忠実を側近で補佐しました。

日記によると、手嶋家は藩主の訪問を受けたり、藩主に煮豆を献上する由緒ある家柄でした。そのため、蹴鞠に熱中する藩主の相手もよくしました。家族は高重と妻、娘、息子の四人で、幼い娘も藩主夫人の下に務めていました。

妻や娘の外出は、親戚へのあいさつと先祖の寺参り、花火程度でしたが、高重は買い物や寄席見物によく出掛け、当時大ヒットとなった「修紫田舎源氏」（のち発禁処分）も講読していました。

家計はすべて高重が仕切り、金策は武士同士の無尽講（金銭融通を目的とする相互扶助組織）を頼みにしていました。藩から支給される年収は百石ですが、米価の変動を受け、二十八から六十両と幅があるため、みそや漬物の自給はもちろん、漁網の内職などで家計を補うなど、上級藩士でも質素な生活ぶりがうかがえます。

○.鶴牧城（陣屋）は房総街道に接して交通の要衝の地、南北東側を境川に囲まれ、西側に正坊山を背に天然要害の城であった。明治３０年に城地をそのまま姉崎小学校の敷地とした。

正坊山（勝望山）

城山の本城を守る外城として絶好の位置を占めていたと思われる。

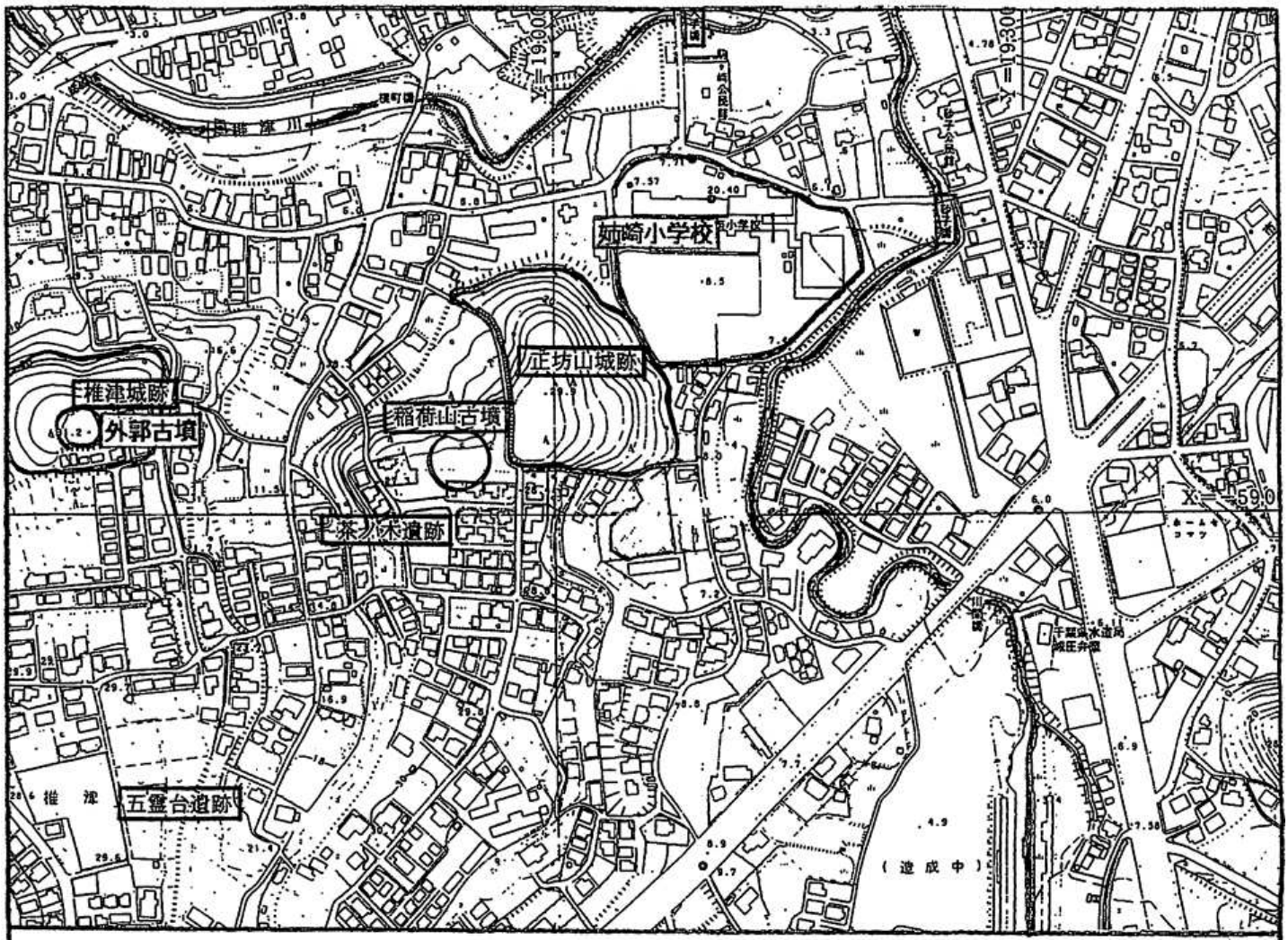
○.正坊山を本拠とした時期

初期椎津城が小規模であった時代

大合戦（天文２１年）が起り多くの死傷者が出るに及んで後の城主が城山を嫌い、再び本拠を正坊山に置いたと思われる時期

正坊山には城造り跡、水濠、軽石を土止めに使った水場等を確認した。

（水場は近年迄旧プールの足洗場として使用していた）



椎津正坊山城跡周辺地形図（S＝1/5,000）

藩関連寺社

八坂神社　祭神スサノオノミコト祇園造り（拝殿、幣殿、本殿）

○．　当社は元、椎津城山内（五霊台）にあったが 1714 年１２月（正徳４年）現在地に還座され社殿を建立した（棟礼に記載あり）
境内は昔の城の下曲輪跡、北側は街道より 1.5m高、南側は椎津城跡。

○．　日本武尊　東征の折、戦勝祈願

○．　１１８０年（治承４年）源頼朝が鎌倉へ向かう折、武運長久を祈願して木製の獅子頭を奉納。

○．　１６４９年（慶安２年）徳川家光が１０石２斗を奉納。

○．　鶴牧藩歴代領主は藩の守護神と仰ぎ元旦及び例祭には奉献し大切に神社をお守りした。

○．　水野忠順公の親筆寄進額と紋章入り高張提灯が現在も神社に残っている。

○．　境内の大銀杏は推定７００年と言われている。他３本のケヤキの巨木あり。

○．　神社は以前祇園天王社と呼ばれていたが明治２年新政府の意向で神仏分離廃仏棄釈の命により主神を牛頭天王からスサノオノミコトとして名称を祇園神社から八坂神社に変えた。現在もその名残として祇園の神額が掲げられている。

注）京都八坂神社本社界隈は今でも祇園の地名で有名である。

○．　昭和１４年５月境内が狭いため本殿を移動し現在に至る。

瑞安寺（浄土宗）１５９６年慶長１年開基

○．　１７１３年（正徳３年）漂流してきた文珠菩薩像（寄木造り立像）を拾い境内に文珠堂を建て安置した（智慧を司どる菩薩）椎津の文珠様と言われ親しまれている。

○．　鶴牧藩主水野氏代々の菩提寺（墓石はないが位牌があり供養している。）

○．　椎津小太郎義昌の両親の仮の墓があったところから小太郎義昌の仮の霊を祀った。空茶毘（からだび）行事の出発点（８月１５日）（市指定無形文化財）

○．　徳川義軍に参加した鶴牧藩士５名が葬むられた墓が建てられている。

行伝寺（日蓮宗）椎津城主椎津又太郎の創建という

○．　境内に椎津小太郎義昌の娘の墓「正受院妙厳」がある。

○．　本堂は境内西部にあったが老朽化が進み明治３８年頃にこれを取壊し当時の庫裏を本堂として現在に至る。

○．　寺の南側はすぐに椎津台の高地（椎津城要害址）に続く。

昔、姉崎には鶴牧藩の前にも藩があった。

○．姉崎藩

松平忠昌（徳川家康孫）初代姉崎藩々主、所領１万石
（在藩　１６０７年～１６１９年）

松平直政（忠昌弟）二代姉崎藩々主所領２万石

歴代藩々主は在任中、姉崎神社に社殿建立、３５石寄進等他、数々の奉納が記録されている。

当時の藩陣屋の場所は残念ながら不明。

直政は１６２４年に福井藩に移り、姉崎は２０３年後鶴牧藩が出来るまで廃藩となる。

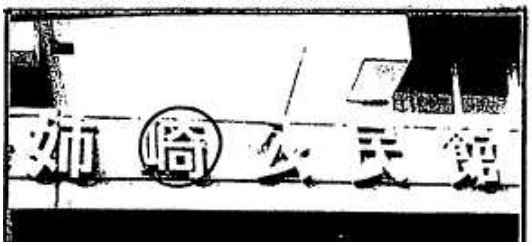
姉崎の名の由来

姉前　旧神社名
　前　姉神が弟神より先（前）に来たとの伝説がある。

姉埼　現神社名
　埼　台地の先端
　1500 年頃姉前から改称

姉崎　現町名
　崎　海へ突き出た岬

姉ヶ崎　JR 駅名
　ケ　江戸時代以降
　俳句等の普及で姉ヶ崎という表現が流行し通称となった。



注　鶴牧村　1889 年～1892 年

姉崎は明治 22 年 8 村併合し鶴牧村が誕生、明治 25 年再度姉崎町と改める。

鶴牧村～姉崎町（姉崎、椎津、迎田、片又木、不入斗、豊成、立野、畑木、深城）

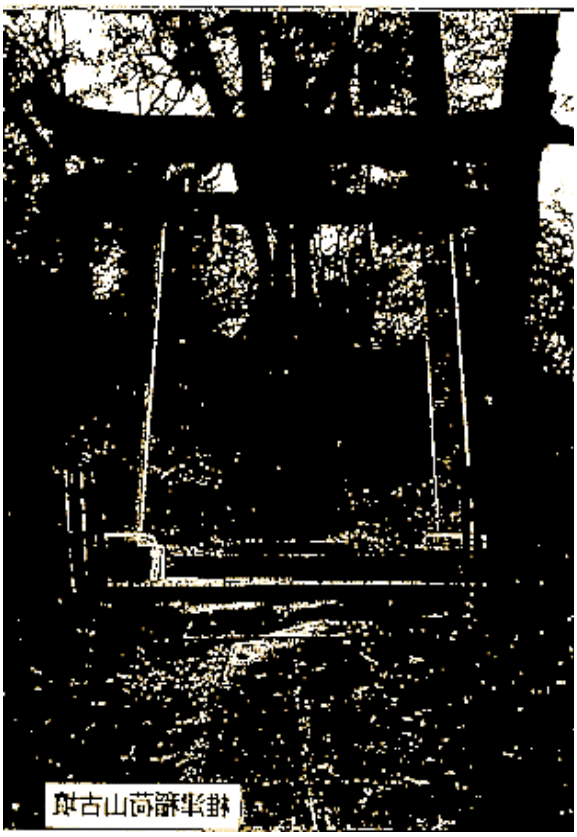
孝子五郎

○．姉崎村におよそ150年前に五郎という若者がいた。
五郎は貧しい中で母に孝養をつくした。
母親は雷が嫌いだったので死んでからも
雷が鳴ると墓にかけつけたと云う。
その話を聞いた鶴牧藩の殿様（水野忠韶）
から沢山の褒美をもらった。
五郎は1847年（弘化4年）に没し墓は
姉崎妙経寺にある。

孝子五郎の墓（妙経寺）

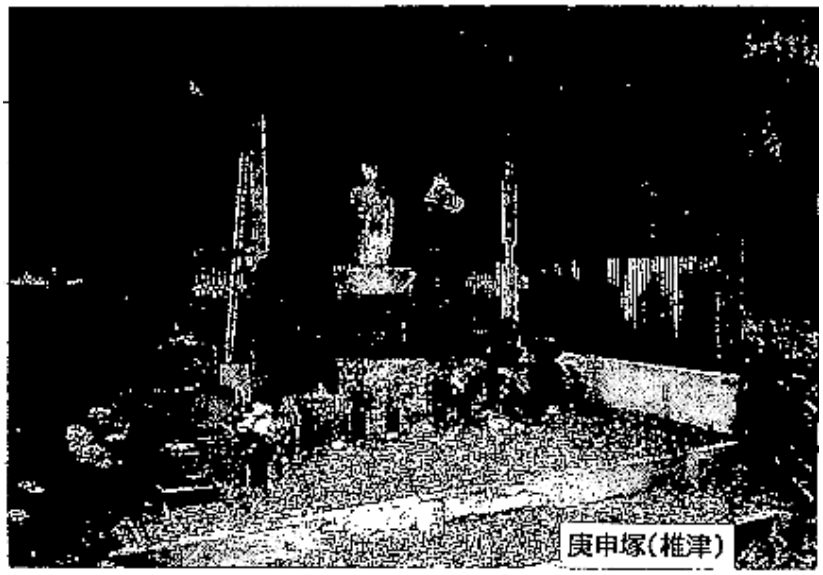
「鳴る神や耳にもふれず孝の道」
渡辺崋山

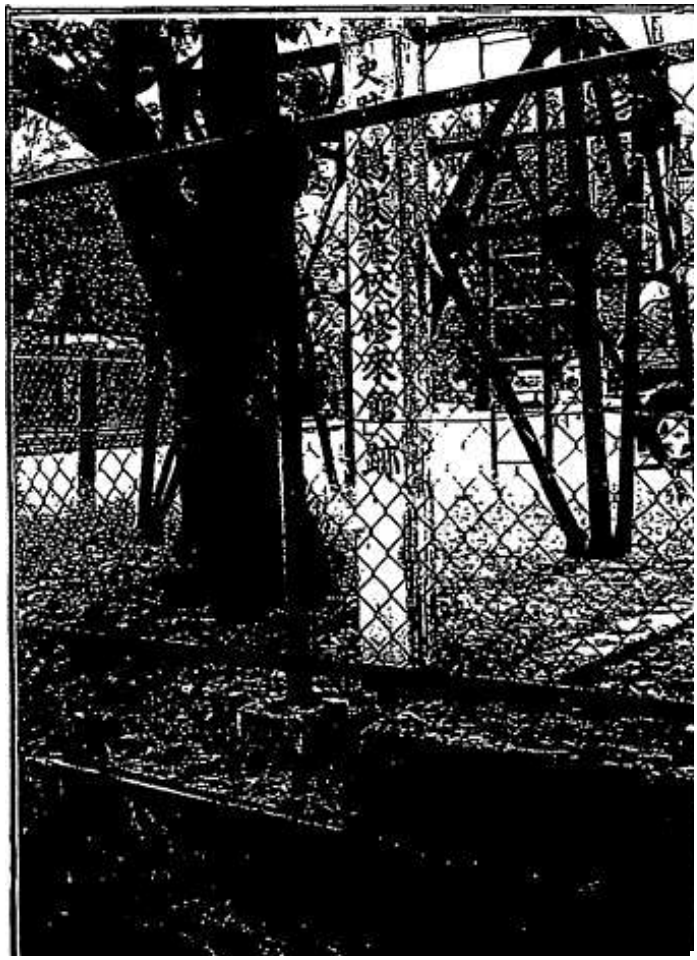
正坊山西側茶の木地区に椎津稲荷山古墳がある。保存状態は良好。
未発掘未調査墳上に稲荷神社を祀る。又、古墳に隣接して庚申塚が祀られている。双方共地元有志によって昔から長い年月大切に保存し守られている。

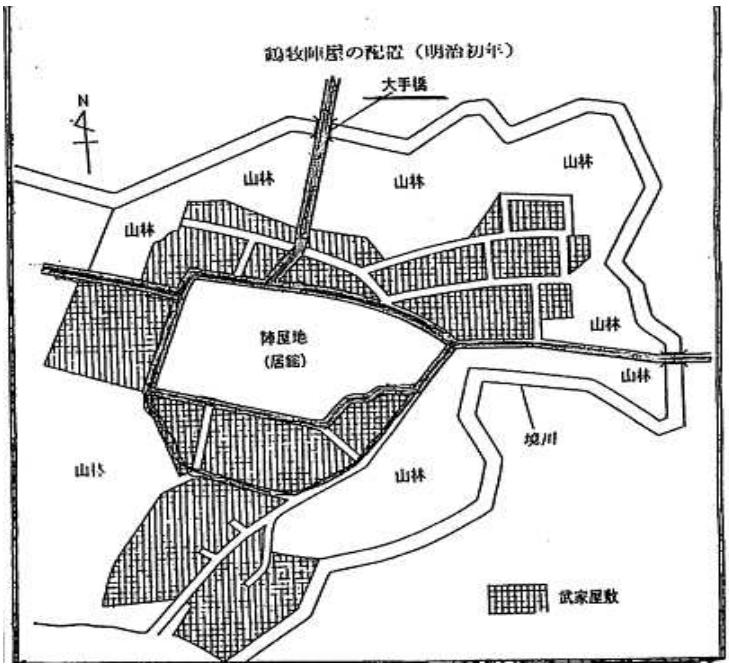

椎津稲荷山古墳

庚申塚（こうしんづか）

青面（せいめん）金銅像　享保4年（1719年）10月
供養塔　正徳1年（1711年）8月
〃　宝暦7年（1757年）10月
女人講碑　年代不詳


庚申塚（椎津）

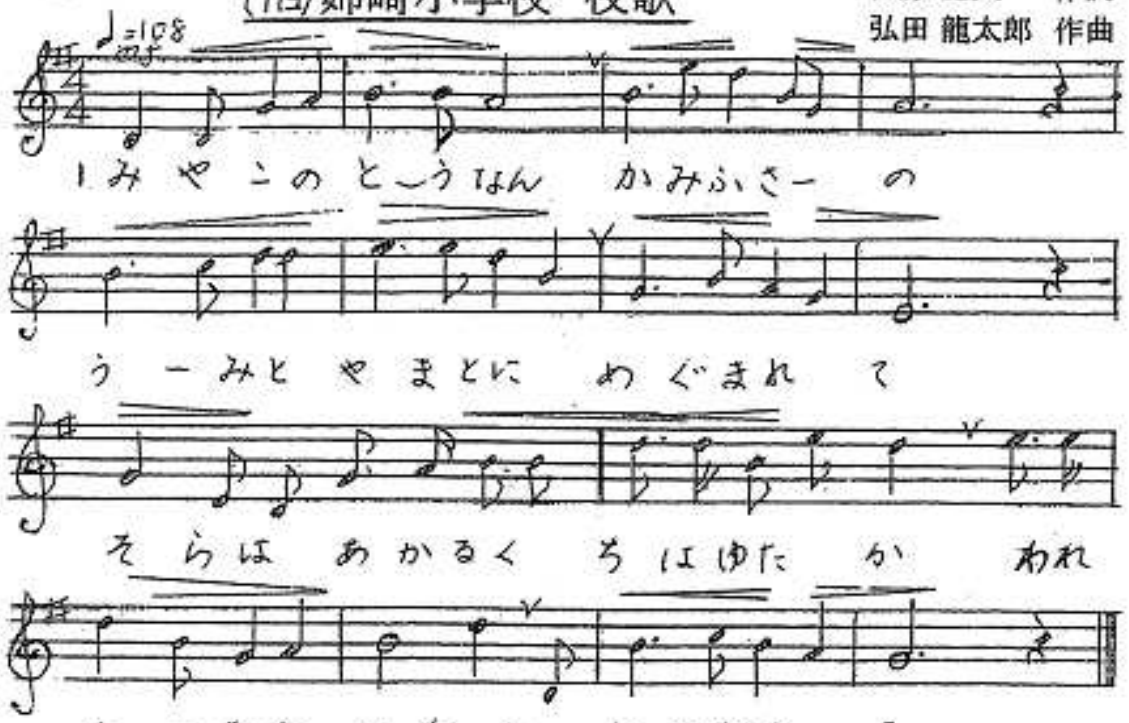



鶴牧陣屋の配置（明治初年）
大手橋
N
山林
山林
山林
山林
山林
山林
陣屋地
（居館）
堀川
山林
山林
武家屋敷

史記評林改訂
鶴牧藩修来館 舊跡

(18)姉崎小学校　校歌

松原 至大　作詞
弘田 龍太郎　作曲



一. 都の東南 上総の
海と山とに 恵まれて
空は明るく 地は豊か
我等の郷土ぞ 姉崎町

二. 明治六年 開校の
歴史は永し 年々に
よき国民と 巣立ちゆく
我等の学び舎 姉崎校

三. 文武に名ある 水野氏の
鶴牧台の 城跡に
聳高くも 輝ける
我等の学び舎 姉崎校

四. 節義と孝を うたわれし
昔語りの 町びとの
誉れ汚さず 身につけて
我等は励まん 国のため

姉崎小学校開校時の仮校舎　妙経寺の庫裏
明治6年6月（1873年）開校
教員3名　生徒55名（男子38名 女子17名）
明治30年11月25日　現在地に移る

昭和初期の姉崎小学生の写生風景。勝望山上から、東京湾方面を望んでの写生で、ここから街を見下ろし、海を見渡した景色は格別で、よく写生の場となった。

久留里西往還道

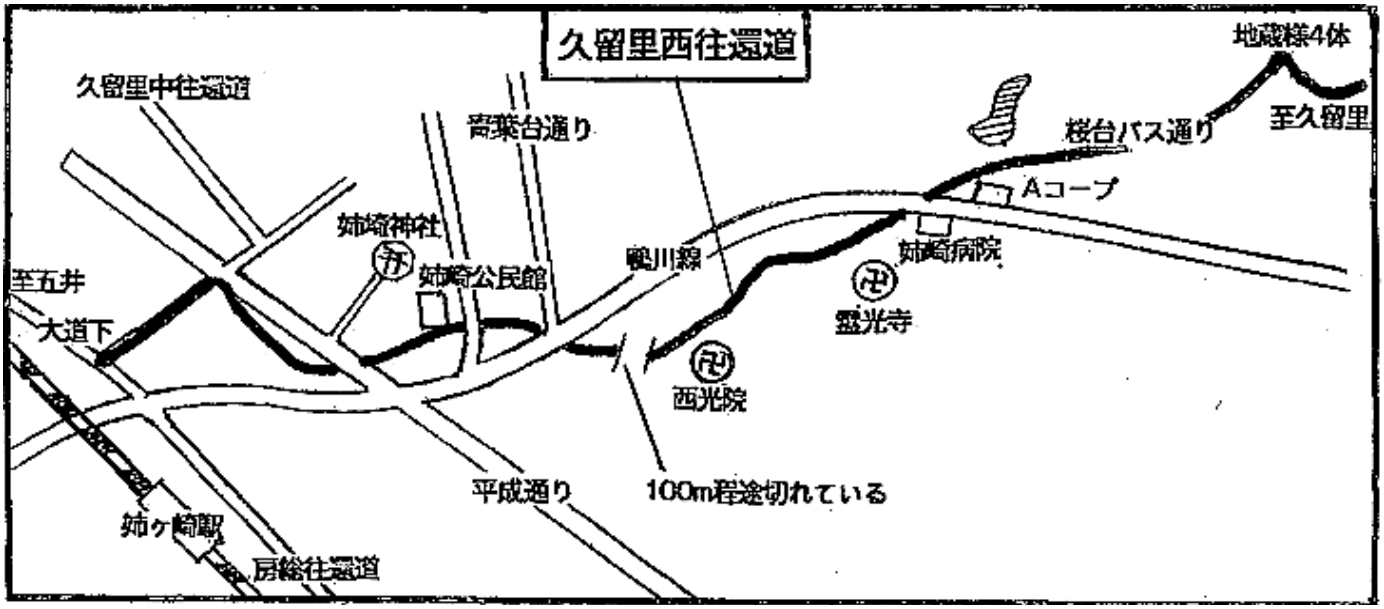
久留里藩の殿様の参勤交代に使われた街道は、巾 13 尺（約 4m）通称殿様道（とんさみち）久留里～姉崎～大道下で房総往還道に合流江戸へ。姉崎地区の西往還道は道筋道巾が江戸時代と大差なく残っていて、現在とても貴重な古街道です。（桜台中央通りは西往還道を拡げたもの）

㊟ 1742 年（寛保 2 年）黒田直純が 3 万石を領地し久留里藩主として入封した。

参勤交代には、180 人～200 人の隊列を組み江戸迄 2 泊 3 日、1 日 40ｋｍ～50 ㎞の強行軍で行われた。宿泊は名主の屋敷や寺院を用いた。

㊟ 参勤交代制は三代将軍徳川家光が 1635 年（寛永 12 年）に定めた。

江戸に近い関八州の藩は年 2 回参勤を命ぜられ、又、江戸に入る道順も遠回りを強いられた。久留里藩では（久留里～今富～佐倉～成田街道～千住～江戸と大回りをして江戸に入ったが、後に藩の財政窮乏を訴え、1758 年（宝暦 7 年）から近道の西往還の道順で許された。



歴史を訪ねて 106

参勤交代の道 にしおうかん 久留里西往還

姉崎から久留里に通じる、久留里西往還と呼ばれる江戸時代からの道があります。その当時は、殿様が参勤交代のときに通った殿様道です。

この道を姉崎から南へ行き、桜台団地を過ぎると、辺り一面が畑の台地になります。

ここの路傍の桜の木の下に、馬頭観音が見られますが、さらに三十㍍進むと、正面にお地蔵様が四体並んでいます。

お地蔵様の台石の一つは、道標になっていて、「北姉かさき道、南くり道、東川原井道」と、建立した年代の「文化二（一八〇五）年仲冬」の文字が刻まれています。

この土地の持ち主の老人によれば、「お地蔵様の正面、十㍍ほど先の左側は、いつの時代のことか分かりませんが、刑場の跡と聞いています。その後、お地蔵様が祭られた」とのことです。

江戸時代は、十両盗むと、打ち首になったといわれます。十両は、今のお金に換算すると、百万円ほどだそうです。

昔の刑罰は、現在のそれと比べて、非常に厳しかったようです。

協力　市文化財研究

刑場跡の近くに立つ4体のお地蔵様